

<書評と紹介> 村井章介・斉藤利男・小口雅史編『北の環日本海世界：書きかえられる津軽安藤氏』

長谷川，伸

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

58

(開始ページ / Start Page)

85

(終了ページ / End Page)

88

(発行年 / Year)

2002-09-30

〈書評と紹介〉

村井章介・斉藤利男・小口雅史編

『北の環日本海世界』

―書きかえられる津軽安藤氏―

長谷川 伸

「北からの日本史」という歴史の見方を目にするところがある。これは、東北・北海道地方という北の地域のアイデンティティと自立性を明らかにし、この地域から日本史全体を見直そうとする研究視角である。とりわけ中世史の分野では、近年の「日本」列島の周辺・境界地域に対する関心の高まりに対応して、平泉と奥州藤原氏・「日の本將軍」安藤氏と十三湊などを始めとして、日々刻々と生まれる最新の発掘成果と、それに基づく多角的な仮説が提示されている。こうした成果はシンポジウムの形で地元自治体や地域住民に公表され（藤崎シンポジウム―北の中世を考える―一九九三年三月）、歴博フォーラム・93市浦シンポジウム遺跡にさぐる北日本―中世十三湊と安藤氏（一九九三年十月）、上ノ国シンポジウム―北から見直す日本史（一九九九年九月）など）、地域の歴史遺産の発見・再評価と、それを踏まえた新たな地域像の形成の段階に入ったといえる。

*

本書は、二〇〇〇年九月二十三日、青森県西津軽郡深浦町を会

書評と紹介

場で開催された『深浦歴史シンポジウム』『環日本海世界』の中の津軽・西浜・安藤氏』（主催、深浦歴史シンポジウム実行委員会・深浦町・深浦町教育委員会）の記録である。深浦町では正しい地域の歴史の理解を通じて人材の育成のため、平成三年より九年度にわたり毎年「深浦町民大学―入づくり連続歴史講座」を開催してきたが、その総括をかねて実施されたのがこのシンポジウムであったという。まず、このシンポジウムを中心に構成された本書の内容を紹介しよう。

はじめに

Ⅰ 中世国家の境界―外浜・津軽を中心に―

Ⅱ 北の環日本海世界と安藤氏

1 古代日本海世界北部の交流

2 中世港湾都市 十三湊遺跡の発掘調査

3 中世深浦と葛西木庭袋氏

4 日の本將軍安藤氏と環日本海世界

Ⅲ 北の環日本海世界をめぐる

討論「環日本海世界北部の社会と交流」（文責）小口 雅史

コメント

胡馬と蝦夷の馬

菊池 俊彦

安藤氏の乱と西浜折曾関・外浜内末部の城郭遺跡

斉藤 利男

「北からの日本史」と「南からの日本史」と

柳原 敏昭

おわりに

高橋 孝男・小口 雅史

第Ⅰ部は村井章介氏による記念講演である。氏は近年の境界世界に関する研究史を整理しながら、境界があるからといってこちらと向こうで世界が違うわけではない、境界世界を拠点として活動する人々とそこで営まれる交易をキーワードとして見ると、境界は柔軟に伸縮するものである、ということをも日本中世の境界の特徴として示した。

第Ⅱ部はシンポジウムの中心となった報告である。小嶋芳孝氏は、奥尻島の遺跡・出土遺物の分析を通じて、この地域が古代より北方世界との交流拠点であったことを具体的に証明し、十三世紀の金の滅亡後、大陸との直接交流が途絶え、サハリン・アムール河口を経由する江戸期の「山丹貿易」のルートに変わっていくという可能性を示唆した。大変大きく刺激的な問題提起である。神原滋高氏はこれまでの発掘データの整理を踏まえて、港湾都市十三湊の具体的な変遷過程を示した。地元の研究者である森山嘉蔵氏は、安藤氏一色の地域史の見直しのため、戦国期の深浦地方に勢力を有した奥州総奉行葛西氏の系譜を引く「葛西木庭袋氏」の存在を紹介した。遠藤巖氏は北方世界における「日の本將軍」安藤氏の位置づけについて、自説を繰り返す形で提示した。

第Ⅲ部は、以上五人の報告者とフロア参加者によるパネルディスカッションとなった。討論は、①深浦の領主葛西木庭袋氏について、②境界の伸縮はなぜ起こるのか、③北部日本海地方と大陸との交流、という三つの論点に整理され、活発な討論が展開された。この部分については、熱心な会場の臨場感と、白熱する討論の様子が手に取るようにわかるので、これによって明らかにされ

た新しい見解を含めて、本書を直に読んで感じ取って欲しい。

ところが、本書はこれだけでは終わっていない。シンポジウムの参加者にコメントを求めたところに、構成上の特徴がある。菊池俊彦氏は小嶋報告についてのコメントを寄せ、この地域の「馬」の問題に言及し、蝦夷の馬が優秀であるという認識があるが、これは女真と蝦夷の交易の中で、奥尻島で大陸から持ち込まれた馬が飼育されていた可能性を等閑視できないとする見解を示した。神原・森山報告については斉藤利男氏が、深浦町所在の鎌倉末期の安藤氏の乱関係遺跡である「折曾関城跡」についての調査分析をコメントした。このシンポジウム全体については柳原敏昭氏がコメントを寄せ、鹿兒島県万之瀬川下流域に展開する中世遺跡群の発見と発掘から、文献史学と考古学の協業によって多大な成果を上げ、自らも関わった鹿兒島県金峰町歴史シンポジウムと比較する。すなわち、「北からの日本史」に対する「南からの日本史」という流れが、今や日本列島の地域空間と国家の捉え方として、北と南の双方の境界世界を視野に入れた研究が可能になったと位置づけた。

このように、本書はシンポジウムの報告集ではあるが、寄稿や構成などに一段と手の加えられた充実した内容になっている。最新の研究動向が反映され、レベルはかなり高いが、会話体で書いてあることもあり、非常に読みやすく、本の値段もお手ごろな仕上がりになっている。中世日本の境界論、あるいは北方地域史の入門書として最適な一冊である。

*

以下、本書とシンポジウムの成果に寄せて、同じく日本海側で研究を続ける者として、若干のコメントをしておきたい。

第一に、日本の北の境界認識の問題である。本書で扱われた北東北地域は、確かに日本の「北」方世界ではあるが、これは中央に対する対極の概念としてシンボライズされた近代以降の地域観によるものであろう。しかし、前近代、少なくとも中世以前における日本の北の境界は「佐渡」だったのであり、北東北はどちらかといえば、「東」の境界といふべきであらう。境界としての東北日本の地域性の問題は、わが越後・佐渡でも重要な研究テーマである。東北日本の境界性の問題は、今後とりわけ日本海側地域で行われている研究動向とのリンクにより、日本海を媒介とした交流のあり方も視野にいれた新たな地域像の創造を望むものである。

第二に、本書のタイトルにとられた「環日本海」という呼称の使用である。編者は「本州北部・北海道から、サハリン・大陸沿岸地方・アムール川流域を中心とする」地域を北の環日本海世界とし、その中に朝鮮半島を含むものであるとする。本書における意図するところはわかるが、現在、特に「日本海」の自称自体が、地名の国際標準化に際して国際問題化している。

日本海の呼称については、日本側は「日本海」、韓国では「東海」と呼び習わされており、両者の歴史的な変遷やそれを踏まえての新しい呼称案についての研究も進んでいる（芳井研一『「日本海」という呼称」ブックレット新潟大学1〈新潟日報事業社、二〇〇二年〉、古厩忠夫『裏日本』岩波新書52、〈岩波書店、一九

九七年〉）。「環日本海」という呼称には、日本海＝東海を囲む地域や人々が、フラットに「協生・共生」する世界にしたいという希望がある。ゆえに、筆者としては、現状ではこの問題こそ慎重に取り扱うべきであるという認識を持っている。

大陸との広範な交流が指摘された本書とシンポジウムの成果や、近年の青森県史編さんによる精力的な中世北方関係史料の掘り起こしという業績から言えば、この場合、南方の韓国を含む「環日本海」というよりは、むしろ「北東アジア」世界の中の津軽地域と考えることに意義があるのではなからうか。

第三に、ところでこの深浦を中心とする中世の地域像は、どのように書き換えられたのであろうか。例えば、十三湊や周辺中世遺跡の豊かな発掘成果が明らかになりつつある。しかし、詳細かつ緻密な調査が進むことと裏腹に、（皮肉なことであるが）十三湊の拠点性や地域の性格というものが、曖昧になった感を持つのは私だけであらうか。

そうした意味で言えば、九〇年代に青森県・北海道各地で行われてきた、中世遺跡に関するシンポジウムとの関連性や、それをふまえた本シンポジウムの位置づけがなかったことは、この地域の歴史像や特質というものが、どのように変貌を遂げようとしているのかを知ることができず残念である。

以上、シンポジウムの本筋から離れたコメントになってしまいが、本書の意図を誤解している点があれば、ご海容願いたい。従来「北からの日本史」といいながら、容易に乗り越えられなかった「中央から見た北の歴史」という周縁的研究を、「北の世界」

全体に広げようという、本書で示された研究視点は、北東アジア地域における日本の、それぞれの地域の歴史解明にとって有益な方法論であることは論をまたない。また、本書で示された様々な問題提起こそ、今までにない新鮮な研究成果の賜物であり、本書の意義であるといえる。

最後にもう一点、本書及びシンポジウムで特筆すべきことは、この市民大学の活動が地域の町おこしの役割を果たしていることである。過去十年のまとめとしてのシンポジウムであったようだが、地域の歴史解明も、歴史遺産を地域の人々とともに活用していけるのも、これからの取り組みが本当の正念場になるものと思われる。近年の青森県内における地域の歴史遺産を大切に保存し、活用していこうという姿勢は、大変注目される取り組みである。次の十年後に、この成果から何が地域に残り、どう花開いていくのか、期待を持って、興味深く見守りたい。

(B6判 一三三〇頁 本体一八〇〇円 山川出版社)